



帝京大学駅伝競走部 中野孝行監督特別講演会



中野監督が19日に総合体育館で行われた特別講演会に登壇し、白糠で過ごした少年時代や箱根駅伝への憧れ、指導で大切にしていることなどを語ってくれました。

私は茶路小中学校で学び、野山や川など自然を駆け回って育ちました。地域の皆さんに見守られながら過ごした「白糠での経験」が今の自分の原点になっています。陸上への道を開いたきっかけの一つが、ラジオで耳にした箱根駅伝でした。当時はテレビ中継も今ほど身近ではなく、ラジオ越しに知った「未知の世界」に心を動かされ「いつか自分もこの舞台に関わりたい」と強い憧れを抱くようになりました。

現在、駅伝競走部が掲げている

のは「世界一諦めの悪いチーム」。言葉があまりよくないので「世界一諦めない」のほうがいいかなと最近思っています（笑）。

大切にしているのは、最初から大きな結果を求めるのではなく、できることを一つずつ積み重ねることです。うまくいかなければ、また挑戦する。最後まで可能性を拾い続けることが大事です。

苦しい状況の中でも諦めずに走る選手の姿から、指導者の自分が「諦めてはいけない」と教えられたこともあります。

同じ人は一人としていません。理解する速さも、力を伸ばすタイミングも人それぞれだからこそ、同じ言葉、同じ方法で接するのではなく、一人一人をよく見て観察して、その人に合った関わり方を考えることを大切にしています。長く故郷を離れていても白糠は「永遠のふるさと」。大好きな町を誇りに思っています。これからも応援よろしく願っています。

中野監督が講演で語った「諦めず、一歩ずつ積み重ねる」という姿勢。その姿勢は、競技の世界だけでなく、何かに挑戦するすべての人へのメッセージとして会場に響きました。

9月20日、「白糠チャレンジシロドーレス大会 with 帝京大学駅伝競走部」が総合体育館前を発着点とするコースで、初めて開催されました。

記念すべき第1回大会は、町内をはじめ、札幌市や函館市、遠くは千葉県など全国各地から404人のランナーが出場し、10km、5km、3kmの各コースに分かれ、激戦を繰り広げました。

大会当日は、激しい雨が降り続くあいにくの天候となりましたが、スタートの号砲とともに、一斉に駆け出し、悪天候をものともせず力強い走りを見せました。

また、ゲストランナーとして、白糠町出身の中野孝行監督率いる帝京大学駅伝競走部から11人の選手が参加したほか、同部OBでプレス工業所属の小野隆一朗選手も出場し、大会を盛り上げました。

実業団選手として活躍してきた小野選手にとって、本大会が現役ラストランとなり、ふるさと白糠の地で選手生活に幕をおろすこととなりました。

参加者にとっては、大雨という厳しいコンディションでしたが、全国トップレベルの選手の走りを間近で感じることで貴重な機会となりました。

帝京大学 駅伝競走部

陸上スポーツ 交流教室

